

種々の発話行為におけるアサーティブネス

— 女性自己主張に欠けるか? —

松村 瑞子

ロビン・レイコフ (1990) は、女性のことばの特徴として、well (あのー)、kinda (…みたいの) といった垣根表現の使用が男性よりも多いことを挙げる。レイコフは、「こういう言葉は、話し手が自分の言っていることについて不確かだ、述べている内容が正確かどうか請け合うことができないという意味を表す。」(105) と述べ、女性は男性よりも種々の場面で自己主張 (アサーティブネス) に欠けるとする。さらに、「同じことのもう一つのあらわれは、断定文の前に付け足す I guess (…という気がする)、I think (…と思う) とか、疑問文の前に付け加えられる I wonder (…かしら) であるが、こういう表現はそれ自体すでに断定や質問の発話行為に困いをし、語調を和らげる垣根表現になっている。」(106) と述べる。

これらの記述を読んで長年気になっていたのは、上記で女言葉の特徴とされている垣根表現の使用や断定表現の前に用いる「…と思う」や「…という気がする」という表現は、(女性に限らず男性も含めた) 日本人の表現形式の特徴とされてきたものであるという点である。

また、これとは全く異なった観点から、男女のコミュニケーションを対照させたデボラ・タネン (1992) は、女性の用いる間接 (婉曲) 表現について、男性であれば直接的に依頼するところを女性は間接的に依頼するため、男性には力の欠如として受け取られてしまうと述べる。タネンによると、この相違は女性は〈和合〉を大切にし、男性は〈地位〉を大切にするという会話スタイルの相違からおこるものであるとする。即ち、このような女性の表現について、「女性は〈和合〉を大切にすることから、そういうスタイルをとるのだ。…あなたの間接的な要請が、相手にも気持ちよく理解され、自分の望むこと

が実現したなら、〈和合〉の視点からはこの上なく満足いく結果である。」(242)と説明する。さらに、別の箇所ではタネンは、女性は人の話を聞くときに聞いているということを示す信号、即ち相槌を発する頻度が男性よりも高く、相手の話に聞き手の反応を示していく傾向が強いが、男性は聞いていることを示す信号を示すよりも、自分の意見を提示する機会が多いという(156)。

ここでも気になっていたのは、間接表現を使用する、相槌を多く用いるという女性語の特徴は日本語の特徴とされてきたものであるという点である。タネン自身も、この記述の後、日本社会で間接表現が重視されていると述べ、さらに沈黙の使用が男女で異なる解釈をされること、また女性は頻繁に謝罪を行っているため非力や卑下のしるしと取られてしまうこと等々の例を挙げる。

さらに、鈴木睦(1997)は、「女性語における丁寧さの規則は、女性語だけに当てはまるものではなく、〈丁寧さを保つためには、聞き手の領域に踏み込まず、決定権を話し手のことがらに限る〉という日本語の丁寧さに関する原則と同じものである。ただ、実際に使用される場合には男性と女性とでは適応される規則の優先順位が異なっている…。男性は日本語の丁寧さの原則を破ることで親しさ・優位性などを示すという方略をとることができるが、女性は女性としてのアイデンティティを保つためには、積極的な丁寧さよりも消極的な丁寧さの方を優先させなければならない」(71)と述べる。ここでもやはり、日本人の発話行為の方略は、女性の方略と一般化されてきた方略と重なるのである。

では、アサーティブネスに関して、日本人は男女共に同様の方略をとるのであろうか？鈴木(1997)が述べるように、日本人の男女にも相違は存在する。その相違は、タネンの述べる原則に関係している部分が大いように思える(松村2001)。本発表では、実際の会話における発話行為を分析しながら、日本人の男女のアサーティブネスについて論じていった。

【参考文献】

- Lakoff, Robin (1975) "Language and Women's Place," *Language in Society*, pp. 45-80. [かつえ・あきば・れいのるず(訳)(1990)『言語と性—英語における女の地位』, 有信堂.]

- 松村瑞子 (2001) 「日本語の会話に見られる男女差」, 『比較社会文化』第7号, pp. 69-75.
鈴木睦 (1997) 「女性語の本質 — 丁寧さ、発話行為の視点から — 」, 『女性語の世界』, 井出祥子編, 明治書院, pp. 59-73.
Tannen, Deborah (1990) *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*, William Morrow, New York. [田丸美寿々 (訳) (1992) 『わかりあえない理由』, 講談社.]

(まつむら よしこ・九州大学教授)